# 激動の世界を生きる

ヨハネ１６：３３

2017/1/27

今の世界は激動の世界です。私たちはその中に生きています。先行きは全く不明です。このような中に在っても、私たちは、共に居てくださる主に信頼して、力強く生き、揺るがない歩みをすることができるのです。今の世界の動きを、例えば国際政治、あるいは軍事、または経済と言うように、側面から観ることができますが、私たちには福音の宣教史と言う、クリスチャン的な側面から捉える必要があります。今の世界の動きを福音史的に観るならば、いくつかの流れが理解できます。

**Ⅰ．第三世界と言われた、発展途上国でのキリスト教の勢い**　現在福音宣教がどんどん進められ、クリスチャン人口が急激に伸びているのは、いわゆる第三世界と言われた、非キリスト教国、非白人諸国です。中でも、高度に発達した宗教が存在せず、またはかつては存在していたことがあったとしても、共産主義という強力なイデオロギーと、それに伴う軍事的力によって宗教を破壊された国々です。高度に発達した宗教がなかった国々はアフリカや東南アジアの仏教国、さらにラテンアメリカ諸国やフィリピンなどのカトリック諸国が入ります。仏教もカトリックもある程度発達していて、長い間福音を阻んできましたが、ここ数十年の間に、もう拒み切れずになってすっかり変わりつつあります。

彼らは、聖書の教える教えと、聖霊の力を強調するペンテコステ系の宣教の波を、押し戻すことが困難になっているのです。いまこれらの土地で力強く宣教を推し進めているのは、聖書の権威をしっかりと信じていると告白し、今生きて現実にお働きになる聖霊を強調するクリスチャンたちです。ただそこにはき危うさもあります。それは、土地の宗教や文化習慣と交じり合って、異なった宗教となっていくことです。彼らの聖書の理解が浅く、目に見える奇跡などの体験を必要以上に重視し、体験だけを求める信仰に流れているためです。

**Ⅱ．　歴史的なキリスト教諸国での教会の衰退**　福音史的に観て、もう一つの大きな流れは、伝統的にキリスト教国と言われていた国々での、教会の衰退です。多くの国々で、大きな教会堂が荒れ果てています。若者たちは教会の教えに耳を傾けません。時代遅れの権威主義だと感じています。彼らは教会の教えるキリスト教の教えの中に、自分の人間性、あるいは良心に合わないものが多く、我慢ができなくなって教会を去ったか、はじめから興味を持てないでいるかです。

彼らが強調するのは教会や宗教を超えた普遍的な人間性です。これは一面、人間本位であり、神を横に置いてしまう危険を持つものです。そのような負の傾向は、例えば、性風俗に顕著です。男か女かわからない人たちが増え、性転換がもてはやされ、同性婚が認められ、同棲が当然とされ、聖書が教えるような

倫理は古いと言われ、あざけられるようになっています。しかし人間の本性を大切にする考え方も、人間性の良いほうが強調されれば、世界の平和、人間の平等、人権の高揚などにつながり、宗教や文化を超えて手を繋ぐことができるようになります。そのような理想を掲げて行動する人たちが、どんどん増え続けているのも事実です。このような二つの異なった流れの中で、私たち日本のクリスチャンは、いかに考えいかに行動すべきでしょう。

**Ⅲ.　正しいクリスチャンの態度**　私たちはこのような大きな流れ、あるいはうねりの中で、確実な聖書理解と、堅実な信仰によって行動しなければなりません。まず、第三世界の急速なキリスト教の伸びは、全体として良いものとして評価しても、その危険性を見て、押し流されないようにしましょう。肝心の信仰理解が、伝統的西欧のキリスト教の教えを、間違った方向にひん曲げただけのものであり、それは人数的にはどれほど大きくなろうとも、純粋な聖書の教えからは、どんどん離れていく可能性が非常に高いのです。

私たちはまた、今の自分たちの信仰のあり方にも、強い警戒感を持たなければなりません。例えば、アメリカの流れに乗っている私たちの教会は、自由主義経済を金科玉条に掲げる文化に流されています。イエス様が、「神と富に同時に仕えることはできない」と、はっきりおっしゃっているにも拘わらず、富を追求して、多くの人々を赤貧のどん底に落としても、心に痛みを感じないキリスト教なのです。

では、伝統的キリスト教国で教会離れしている人たちはどうでしょう。私たちは彼らの中に、日本人の中にも昔から見られた、本源的な人間性を見ることができます。それは、人間が神に似せて造られたという、聖書の記述を認めることです。彼らが西欧の教会を見捨てたのは、彼らの心が、神に造られた本源的な人間性に目覚め、西欧キリスト教の誤りを見破ったためです。日本人の多くがキリスト教を受け入れないのは、自分たちが感じている本源的な人間性に、合致しないばかりか、返って逆行していると感じるからです。聖書もなくキリスト教会もなかった日本のほうが、伝統的キリスト教国に比べても高い、人間性と倫理性を保持して来たのです。西欧キリスト教諸国が戦火に明け暮れ、強国のクリスチャンたちは人殺しと略奪を正当化し、世界中で虐殺と略奪を繰り返していた時代、日本は徳川幕府の下で、戦争のない２６０年間を送っていたのです。戦争のために発展した機械文明や、自然化学には後れを取ったとしても、人間性を大切にした社会を作り上げ、戦争とは関わりのない文化の花を咲かせていたのです。

ただし、神に似せて造られた人間本来の姿は、罪のために破壊されてしまっています。堕落によって捻じ曲げられた人間性を、神に似せて造られた人間性と同じに考えてはなりません。罪の力は非常に強く、聖霊によらなければ、人間はそれに勝つことができません。人間が罪のために造り主を離れた結果の最悪のものが、偶像礼拝です。（ローマ１：１８－３２）その偶像礼拝に対する神の裁きとしてもたらされたのが、性的な混乱であり、それに続く多くの犯罪です

聖書の教えに立脚しようと願う私たちクリスチャンは、このようなことを理解した上で、具体的な判断と選択と行動をしていかなければなりません。第三世界のキリスト教の進展を手放しで喜ぶことはできません。伝統的キリスト教諸国の教会離れで悲観する必要もありません。人間性に目覚めた人間の当然の行動と考え、私たちも神に似せて造られたものとして、共通の意識を持っていることを認めましょう。しかし、彼らの人間性には、罪によって捻じ曲げられた部分が強烈に現れていることもしっかり理解し、道徳的廃頽を人間性であると強弁するような人々には、警戒感を持つことが大切です。

現在、アメリカにはトランプが大統領に就任し、イギリスは UE を離脱し、プーチンは虎視眈々と隙を伺い、習近平は大国主義を目指し画策しています。北朝鮮は相変わらず理屈も何にもなく、韓国は被害者意識丸出しで叫び狂っている状況です。最近まで世界は、少なくても外見上は、人権や民主主義、世界平和を歌い上げる良識をかざしながら、物事を進めてきました。しかし、上記の人物や国々はそういう隠れ蓑を脱ぎ捨てた感がします。まるだしの自己中心、自国中心の経済的侵略、そして地域的侵略を進めたいという欲望が、透けて見える気がします。安定した国際関係は、まず望めなくなるようです。

このような中で私たちに大切なことは、聖書の教え、西欧キリスト教の教えではない、聖書の教えをもっとしっかりと学び、理解することです。そしてこの理解に立って、造り主である神に従う生き方をすることです。そのような生活の仕方は、裏切られたり、損失を被ったりすることでしょう。しかし私たちは、私たちを愛しお守りくださる神の、み翼の陰に平安をもって生きるのです。